

塾生の「素直さ」を引き出すために——本(もと)とつながり、心の癖をほどく

後継者倫理塾 澤田 省悟 塾長

東京都後継者倫理塾は今期、20期の節目を迎えました。塾長を務める澤田省悟氏は、入塾してくる塾生たちの姿を、鋭く、かつ温かい眼差しで観察し続けています。

「入塾当初から目的がはっきりと定まっている人もいれば、人や親に勧められて何をしたいかわからない状態から始まる人もいます。しかし、修了するまでに倫理を認識し、自らの目的を定めていくプロセスにこそ、塾の真価があります」

観察から始まる「気づき」のアシスト

澤田塾長が指導にあたって最も重視しているのは、塾生の「観察」です。本人が無意識に行っている口癖や所作にこそ、課題の核心が隠れていると言います。

「相手と正対して挨拶ができる人は意外と少ない。なぜ正対できないのか、その原因を探っていくと、過去の原体験の中で身についた習慣に行き着くことがあります。例えば、非常に聡明ながら正対が苦手だったある塾生には、旅館で朝一番に会うときのような寝ぼけている状態でもしっかり挨拶をするようアドバイスしました。彼は素直に実践し、相手によって無意識に変えていた態度を改め、見違えるほど丁寧に接するようになりました。指導というより、本人が『これかな』と気づくためのポイントを見つけ、そっと背中を押すイメージです」

素直さを遮る「壁」を、過去から紐解く

塾のカリキュラムにおいて、澤田塾長が「最大の集中をしている」と語るのが、塾生の「すなおさ」を引き出すことです。人は本来、素直に生まれてくるもの。しかし、成長過程での体験が壁を作り、素直な心にブレーキをかけてしまう。

「特に親との確執が原因となっているケースが多い。そこで100日実践では、両親が健在であれば、自分が生まれた時のことや幼少期の話を改めて聞き取ってもらい、それを日記や手紙に書き出すよう指導しています。自分のこだわりや心の癖の原因に気づき、両親に謝罪や感謝を伝えることができれば、自ずと素直さにたどり着けます。強制ではなく、本人が『やってみようかな』と思えるよう、好奇心を湧き立たせる誘導を心がけています」

今期の20期では、開校直後の富士研合宿を「本(もと)とつながる」ための時間とし、厳しい訓練よりも、自分の内側や生い立ちを掘り下げる「遠足のような雰囲気」を優先しました。まず体で倫理の世界観を感じてもらうことで、拒否反応のある塾生も「歩くところから」始められるよう配慮したのです。



覚悟を持って「あり方」を磨く

澤田塾長は、後継者倫理塾を「あり方を学ぶ場」と定義します。決算書の読み方といった技術(やり方)以前に、経営者の人格が反映される「見えない世界」の土台を作る場所です。

「最後はやはり『覚悟』なのだろうと思います。自分の人生を本当に良くしたいという本気度。塾生同士のLINEグループで毎日実践報告をし合い、運営スタッフが愛情を持ってお尻を叩く。そうして自分の限界点を超え、棚上げしてきた課題に仲間と向き合う。それが塾の『本気』です」

かつて自身も塾生として学び、多忙ゆえに塾に恩返しができなかった振り返る時期を経て、今、塾長としてバトンを繋ぐ澤田氏。その視線の先には、純粹倫理を基底にした経営者が次々と育ち、各単会の運営を盤石にしていく未来があります。

「塾生も運営スタッフも、一人も漏らさず幸せになってもらいたい。本気で向き合えば、その連鎖は必ずつながっていきます」